

2019年7月14日(日)／説教者：國分美生

説教：「イエスのたとえの新しさ」

聖書：マタイによる福音書13:24～33

福音書にはたくさんのたとえ話が語られており、そこからイエスがいかにとえ話を多く用いて、民衆に神の国を宣べ伝えたかということがわかります。物語仕立てになっているものといえば、「放蕩息子」のたとえや、「善いサマリア人」のたとえ。直接的な比喻であれば「あなた方は地の塩、世の光である」など。聖書においてたとえは「生活上の経験に照らして真実である短い物語で、何らかの霊的真理を教えるために与えられるものである。」という言い方ができます。

本日の聖書箇所には、毒麦、からしだね、パン種、というモチーフが登場します。このたとえは決して牧歌的に語られたものではありません。「毒麦」のたとえではイエスは回心をしなかったガリラヤの町々が、審きの日にはどのようになるか厳しく言い放ちます。ユダヤ教において麦はユダヤ民族、毒麦は異邦人という解釈がされます。ですから民衆にとっては、神の民であるこの自分たちが毒麦にたとえられるなどということは、理解できない、理解したくないというのが本音だったと思います。

一方からしだねとパン種のたとえでは神の国の希望が語られています。あらゆる種の中でも最も小さいその種は、成長してどの野菜よりも大きくなり、一本の木になって鳥たちがやってきて巣をつくるほどになる。また神の国はパンだねと同じだとも言います。そのパンだねを粉の中に埋めると、粉全体が発酵して膨らむのです。それらの譬えは、きいたイスラエルの人々を驚かせ、動揺させるものでした。なぜなら、イスラエルの民にとって神の国とは力強い王によって輝かしい勝利とともに、自分たちに自由が与えられる出来事として旧約時代から考えられてきたからです。パン種のたとえでとくに注目したいのはパン種を粉の中に埋める、という表現です。外からははっきり見えないような、目立たない力が大きな働きをして神の国は大きく広がっていくということを言い表しています。

神の国は、私たちの日常のただ中で、私たちが気付かないようなところ、私たちが特別見向きもしないようなところからぐんぐんと力強く始まっている。そのメッセージがイエスの譬えの新しさ、当時の人々にとっては目から鱗の斬新さでありました。

人々の日常生活のただ中から起こり、周囲を巻き込みながら膨らんでいく神の国のイメージは、イエス・キリストの地上での歩みそのものを思い起こさせます。(國分美生)